



先行一杯
後方儘



ippaimama

<今週の予想>

◎8番ミリオンディスク

○12番フジノウェーブ

△4番ヤサカファイブ

△3番ジーエスライカー

出走表を開いてみて、開口一番第22回だって？と驚いたのは自分だけでないはず.....と思いたい。交流重賞・東京スプリントとしての開催は一昨年からだ、その前身東京シティ盃 (SIII) は1991年以来20回 (途中レース名も変わったが) の開催を数える。だが、こちらは距離も1400であった時代が長かっただけに、どうもこのレースが後継という感じがしない。なので、毎年この施行回数をみるたびに驚いている記憶力が貧弱な私である。ここは今年こそその中の記憶をしっかりと脳みその裏側まで焼き付けて、来年からは何食わぬ顔で予想に入れるようになりたいものだ。

本命はミリオンディスク。既に7歳になった同馬だが、成績が安定したのは昨年から。地方の交流重賞を転戦して、どんな相手でも大きな遅れを取らずまとめてきた。だが、勝ち星はメンバーが一段劣った北海道スプリントカップのみ。その他では好調期のスーニやスマートファルコン、サマーウインドに1着を譲り格下の身分に甘んじている。今回はスーニも本調子でなく、サマーウインドも回避したとあっては中央馬の中では実績上位。もうこれ以上待てぬ、きっちり勲章をもち取って帰る覚悟だ。前走ポラリスSも地方で走り慣れた本馬に休み明けいきなり中央の不良馬場を走れと言うのも酷な話、しかもあきらかな内ドン詰まりの騎乗。それでも着差は0.6と着順ほど負けてはいない。もしこれが原因で人気落ちるようならなおさら狙える。

フジノウェーブはディアヤマトにすら2馬身差つけられたウィンターズプリントの走りを見る限り、正直完全に終わった馬と思っていた。そこに前走東京スプリング盃のあの鮮やかな勝ちっぷり。まったく困ってしまうような、実績に恥じない貫禄たっぷりの走りだった。交流重賞では前につけられなくなって久しいのが気がかりではあるが、今の大井の馬場は湿ってやや前有利とはいえ、外も伸びないわけではないので大きなマイナスにはならないだろう。今年はJBCも地元開催、秋にもう一花咲かせるべく、ここで無様なレースはできまい。

そのほか差し手なら当然、ヤサカファイブも確実に伸びてくるだろう。前走だって、上がり36秒台はこの馬と フジノウェーブ だけだ。だがやはりどうも勝ちきれない馬だけに、フジノウェーブよりも展開・位置取りに左右されやすい。ジーエスライカーはここ2戦、大きく評価は落としていないが交流重賞でどうこうするほどの強さを見せたかと言われれば疑問。今の馬場を味方につけたところで、逃げ切りアタマまでは想像できない。

馬券的には、◎○の連絡みを本線とし、△が両馬とも2枠に入ったこともあり枠復2-6を抑えに回すのが適当か。

本予想によって生じた損害等には、一切の責任を負いません。

<今週のてきと一雑感>

ばんえい競馬が帯広市による単独開催になってから、早くも5年が過ぎたらしい。その間通年開催化、オッズ・パークロトの導入、とかちむらの併設などあれやこれやと売上増・収支均衡に向けた施策を打ち出してはきたものの、それがどれだけ実を結んでいるかという疑問である。そんな中、北海道新聞朝刊の社会面にて4月12日から3日間連続で、『単独開催5年目の苦悩——帯広ばんえい競馬』との特集記事が組まれた。言うまでもないが、ばんえい競馬は世界でも日本の北海道にしか存在しない競技だ。いつの時代にも消えゆく存在があることは避けられないとはいえ、貴重な馬事文化としての側面もあるこの競技がなくなるとを望む競馬ファンはおるまい。そこで、ここでは特集記事について簡単にまとめてみたい。ただし、正直に申し上げて私はばんえい競馬は年に一回ばんえい記念しか買わない、にわかファンと呼ぶのもはばかれるような身である。だから熱心なファンの方からみればあんまりに頓珍漢なことを書いてしまうかも知れないが、その点はあらかじめご了承願いたい。

さて、この特集は毎回写真入り、大きな段組で比較的目的立つ記事だ。三回にわたる特集では各回(上)馬主(中)生産者(下)施行者に対象を絞って、聞き取りを中心に関係者による生の声を拾っていく体裁を取っている。それぞれの内容を箇条書きで書き出してみると

(上)

- ①14歳のゴールドバージの人気と、その裏の定年制廃止に見える馬不足
- ②売上減による賞金の減少、特に売上に応じた変動制による実質収入の激減
- ③大半の馬は赤字であり、体力のない馬主の撤退が馬不足を加速させる
- ④馬主だけに負担を押しつけない制度設計を要求

(中)

- ①ばんば生産数の大幅な減少(10年前比4割)
- ②賞金の減額に引きずられる形での子馬の価格低迷
- ③生産者賞の拡充、ばんば生産者が馬主になりやすいような特例制度を

(下)

- ①「とかちむら」による入場者数の増加
- ②観光資源としてのばんえい競馬の存在感
- ③一方、売上は低迷。中長期的なビジョン策定に向けて委員会を設置

となる。この内もっともショッキングな内容だったのは(上)②の売上と下方連動する変動制賞金制度で、最も悪かった次期には公称賞金の2割ほどしか支払われなかったというのだから関係者の生活に与える影響は想像に難くない

。だがこれに関しては、今年度より賞金のさらなる減額と引き替えに制度が見直され([リンク](#))

、ひとまず賞金の皮算用くらいはできるようになったようである。そのほかの内容については、今更多くを語るには及ばないだろう。どれもばんえい競馬だけではなく、軽種馬による地方競馬にも通じる問題だ。

そして、個人的な感想をば少し。ばんえい競馬についてよく思うのは、これは三競オートに続く「第四の公営競技」だということ。そりゃ一応、「競馬」と名は付いてはいるけれど、レースの様子も面白さもまったく平地とは別物。なにより、公営競技を公営競技たらしめている「予想」のやり方が平地とはまったく違うのだから、同じ馬を扱っているからといってまとめて「競馬」で括ってしまってはどうしようもない。

ところが、ばんえいの専門紙などが提供する予想情報が「ばんえい」に特化した物であるとは言い難い。もちろん馬場水分などばんえい独特の情報は載っているのだけれど、どうも平地の新聞に引きずられた馬柱のように感じる。例えば、この馬はそれぞれどこで何回息を入れたとか、この騎手（ばんえいほど騎手の腕が問われる競馬はない）はどういった騎乗をする傾向にあるのかとか。もちろん、このあたりは競馬ファンがそれぞれ独自に開拓していくことに喜びがある部分でもあり、おそらく本場にいけば大学ノートにこういった情報をびっしり書き込んでおられる古き良き馬券親父が、一人くらいは見つかるかも知れぬ。だが、今やそうした「コアな馬券師」に売上を頼ることはできない時代だ。今後を考える上でメインになってくる客層は、インターネットの向こうにいる全国の競馬ファン（多くは平地ファンのはず）や、とかちむらに訪れるような観光客だろう。しかも、彼らには「馬券を買う」客さんになって貰わなければならない。こうしたお客さんもせっかくの機会だから、少しくらい買ってみようかという気持ちはあるだろう。ならば、こうした「やってみたい」とひとまず思ってくれた層へのアピールが、今のばんえいに最も大切なことだ。その為には、「ばんえいを予想する」こと独自の面白さと奥深さを知って貰う必要が出てくる。その彼らに対して、今のばんえいの競馬新聞は十分な情報と指針を提供できているのだろうか？（専門紙のプロ）がどのような予想を取っているかという、ある種の「お手本」を納得できるほど詳しく示せているのだろうか？

これは、中央競馬を覗いた公営競技の専門新聞全体にあてはまる問題でもある。「印」以上の情報と蘊蓄が、右も左もわからない初心者こそ必要なのに、長くそれを担ってきたのは職場の先輩のようなファンそれぞれの無意識の活動だった。いったんその流れが断ち切れ、ファンの年齢層が大きく偏ってしまった今、もとのサイクルに復帰するのは用意ではない。その結果が競輪や競艇は、施行者側のHPで専門紙と提携して情報提供を行っているところもある。幸か不幸かばんえいは帯広一場のみ、専門紙も競馬ブックと金太郎の二社だけと小回りのきく身だ。ばんえい競馬も「ばんえいを予想する」ことの魅せ方について、ひとつじっくり協議してみるのはどうかなあ、などと控えめに言ってみたところで終わる。

本予想によって生じた損害等には、一切の責任を負いません。